

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 『グストル少尉』：身分制社会崩壊の予兆 |
| Author(s) | 武田, 智孝 |
| Citation | 広島ドイツ文学, 29 : 1 - 16 |
| Issue Date | 2015-11-20 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038664 |
| Right | Copyright (c) by Author |
| Relation | |



『グストル少尉』 — 身分制社会崩壊の予兆

武田智孝

はじめに

『グストル少尉』については5年前に、ルース・ベネディクトの言う「恥の文化」としての名誉と、そういう名誉に対する批判ということに焦点を当てて小論¹を發表した。だが、そこでは主人公を取り巻く当時の社会状況への目配りが不十分で、そのことが気になっていた。その後、世紀轉換期ハプスブルク帝国における身分制秩序の破綻と崩壊というテーマをシュニッツラー文学やヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』に見出し、論文にまとめたりもしたことがきっかけで、この小説もまたそういう視点から読み直す必要があるのではないかと考えるようになった。

主人公グストル少尉が周囲の状況に規定され易い凡庸な人物であり、とりわけ新米の将校として名誉の観念や名誉規定(Ehrenkodex)に支配され尽くしたマリオネットであることはつとに指摘されている通りである。² あえてそういう木偶・阿呆を主人公に設定することで浮き彫りにされているのは名誉や名誉規定の問題性ばかりではなく、とりわけ、世紀轉換期ハプスブルク帝国における理不尽な差別的身分制秩序の末期症状なのではないか、そういうテキストの意図を強く感じるようになった。

今回の拙論では、一市民に対してうっかり口を滑らせたとはいえグストルがなぜ「あんなねえ、あんたつべこべ言うんじゃないよ!(Sie, halten Sie das Maul!)」(S.15)³などという暴言を吐いてしまったのか、相手のパン屋の親方が怒りを露わにして、名誉ある将校相手に手厳しい懲らしめを行うことの意味は何か。なぜ少尉のサーベルの柄を押さえ込んで動きを封じ込め、あたりを気遣いながら低い声で叱責するのか。悶々とする主人公の一夜にわたる長い独白の中心にある葛藤は何か。それらすべてがいかに当時の身分制社会の慣習と深く関連しているか、名誉規定のみならず差別的身分制社会秩序の枠組みといかに密接

¹ Takeda, Tomotaka: Die Ehre als Kultur der Scham und deren Kritik in „Leutnant Gustl“ In: Beiträge zur Germanistik in Hiroshima 24. Hiroshima, 2010, S. 1-16.

ホームページ Germanistenkreis in Hiroshima から pdf ファイルをダウンロードできる。

² Lindken, Hans Ulrich: Interpretationen zu Arthur Schnitzler. Drei Erzählungen. Von Hans Ulrich Lindken. München 1970. S.80.

³ Schnitzler, Arthur: *Lieutenant Gustl*. Stuttgart(Reclam) 2002 Hrsg. Von Konstanze Friedl. S.15. 以下、同書からの引用は(S.ページ数)の形で記す。

に関わる形で物語が進行しているかを論じるとともに、この小説より 11 年前の 1889 年に初演されて大成功を取めたズーダーマンの戯曲『名誉(Die Ehre)』との比較を通してシュニッツラー小説の特性を明らかにしたい。

1. 差別的身分制秩序とその破綻の兆し

小説の背後には、名誉ある身分、決闘資格を有する(satisfaktionsfähig)身分と名誉なき身分、決闘資格を有しない(satisfaktionsunfähig)身分からなる差別的身分制社会がある。

主人公は将校で、名誉ある決闘有資格者であり、将校を律する名誉規定に何の疑いもなく従って生きている。他方、身分制社会の秩序は一般庶民の批判精神や権利意識の目覚めによって破綻をきたし始めている。この変化に気付かない将校(主人公)が名誉なき庶民の誇りを傷つけてしまうところからこの小説は始まる。

友人から音楽会のチケットを貰った主人公グストル少尉はコンサートに出掛けるが、宗教曲なのですっかり退屈する。終わった後クロークルームで順番待ちをする際、苛立ちから顔見知りのパン職人ともめ、「つべこべ言うんじゃない!」(S.15)と言ってしまう。現代であれば、相手の社会的人格を無視した粗暴な言い方である。しかし即座に誠意をこめて謝罪すれば、一悶着あったとしても何とか赦してもらえるかもしれない。グストルも「しまった、言うんじゃないかった、乱暴すぎた」(S.15)とすぐ後悔する。しかし謝らない。「しかたない、もう遅い!」(S.15)と思うのである。

「乱暴すぎた」と思うのに、なぜ謝らないのか。あっさり読み進むべきではない箇所であるが、これに対する相手の反応も問題なので、ひとまず先を見ておきたい。

アタマに来た相手(パン職人)は、『いいかね少尉さん、おとなしくするんだ』⁴と言って、グストルのサーベルの柄を押さえ込み、『少尉さん、もしちょっとでも大声出したりしたら鞘からサーベル引っこ抜いてへし折ったやつを司令部に送りつけてやるからな。このアホガキめ(dummer Bub), 分かったか?』(S.15)と言う。相手は怪力の持ち主でグストルは身動き一つできない。

パン屋がカッとなるのは当然としても、なぜそこまでやるのか。現代なら非礼を咎めて謝らせ、それでその場をおさめるだろう。それでも相手が謝罪しなければ少々面倒なことになるかもしれないが。

この場面の問題点は次の三つ。

- ① なぜグストルは「つべこべ言うな」などという「乱暴な」口の利き方をしてしまったのか。
- ② 後悔するのに、なぜ謝らないのか。
- ③ パン職人はなぜああいう形で少尉を懲らしめるのか。

⁴ 底本に選んだ Friedel 編集の Reclam 文庫版では主人公以外の者の発言は »» «« のように引用符を二重にして、主人公の発言と区別しているのので、翻訳でも『』とした。

これらは関連しあっているが、まず②の謝罪しない理由から見ておこう。

将校は名誉ある上層であり、相手は職人、名誉なき一般市民である。これが謝罪しない理由である。当時の身分制社会では上層(将校は名誉ある階層)から下層への侮辱ということとはありえない。名誉を授けられているのは上層だけで、下層には傷つけられるほどの名誉など与えられていないのである。この際、名誉は社会的人格と言い換えてもよい。〈名誉=社会的人格〉を認められていない下層に対しては上層から何を言っても、何をしても、身分制社会の論理からすれば、非礼にならない。上層が下層を侮辱するなどということは原理上あり得ない。だからグストルは謝らないのである。⁵

もし双方がともに名誉ある階層なら、*»Sie, halten Sie das Maul!«* は謝罪の利かない言葉である。いったん口にされたが最後、即決闘。もし言われた側が決闘要求もせずそのまま引き下がってしまったりすれば、侮辱によって傷つけられた名誉を回復する努力を怠ったとして、名誉を失う。つまり上層社会で生きて行く資格を失う。これは社会的な死を意味する。言った側も自分の発言に対して徹底的に責任を取らねばならない。決闘要求に対しては受けて立たねばならない。許しを請うなどという選択肢はありえない。だが、名誉なき下層の者が相手の場合には、謝る必要すらないのである。

グストルがなぜ*»Sie, halten Sie das Maul!«* などという「乱暴」な言葉をつい口にしてしまったかという①の疑問もここから説明できる。

「どうして〈つべこべ言うな!〉なんて言ったんだろう? どうして口を滑らしたんだろう? 普段は礼儀正しい人間なのに ... 従卒に対してさえあんな粗暴な口の利き方したことないのに ... もちろん神経質にはなっていた — いろんなことがいっぱい重なったからなあ ... トランプはツイてない、シュテフィからは断わられっぱなし — 明日午後の決闘 — 最近の睡眠不足 — 兵舎は絶えず騒々しい — こんなのが長く続くと堪えられないよ! ... 遅かれ早かれ病気になってただらう ... 休暇願出すことになってただらう ... 」[傍点引用者。以下も同様] (S.29f.)

そういった事情があつて苛立っていたのは確かである。だがもし相手が同じ〈名誉ある〉将校仲間か貴紳であれば、つまり〈決闘資格を有する〉上流人士であれば、うっかり「口を滑らした」りはしなかつただらう。決闘覚悟でなければ決して口にしたりはしない言葉だからである。(例えば *Freiwild*)⁶ 「口を滑らした」のは、相手が町人風情と無意識の

⁵ 武田智孝: 民主主義にして反民族主義, 『ラデツキ行進曲』の振じれ 広島ドイツ文学 26号 2012年. 所載 特に 19-24頁 (警備隊長スラーマの妻がヨーゼフ・フォン・トロッタ少尉との不倫の末に身ごもり, 死産で自らも死んだあと遺品の中から少尉からの恋文が多数出てくる。この恋文の束を持参した曹長に, 少尉の父親はなぜ冷淡至極な態度を取るのか, 少尉が曹長に直面した際なぜ謝らないのかについて論じた部分)を参照されたい。

ホームページ Germanistenkreis in Hiroshima から pdf ファイルをダウンロードできる。

⁶ Schnitzler, Arthur: *Freiwild*. (禁漁期外で自由に撃ち殺してかまわない獣を *Freiwild* と言う) In: Gesammelte Werke. Die Dramatischen Werke Erster Band S. 296.

うちに見くびっていたからだ。作中そういった説明・解説は一切なされていないけれども、ここには差別意識が根底にある。潜在的な身分的驕りから来る気の緩みがある。

そのような彼の驕りと差別意識は次のような独白からも見て取ることが出来る。

「連隊じゃ — 誰一人見当もつかないだろうな、おれがなぜそんなことしたか ... みんな首をひねるだろう ... どうしてグストルのやつ自決なんかしたんだろうって? しがないパン屋ふぜい(ein elender Bäckermeister)が、たまたまおれより腕つぶしが強かったってだけのあんなゲス野郎(so ein niederträchtiger)のせいで自決したなんて、そんなこと誰が思うものか ... がまんならんよ、がまんならん! — そんなことでおれのような者が、こんな若いかわいいうやつが。」(S.20)

「明日になったらみなに知れわたるよ ... あんなパン屋みたいなやつ(so ein Mensch)が言いふらさないなんて、一瞬でも想像するなど愚かにもほどがある ... いたるところで話すよ」(S.21)

「もし俺の自決を知ったらパン屋のやつなんて言うかな? ... あんちくしょう! — まあ、動機は分かるよな — ハッと目が覚めるだろう — やっと分かるだろうぜ、将校ってものがどういうものか! — あんなやつらは通りで殴られたって名誉喪失なんてことにはならない(keine Folgen), ところがおれたちのような将校ともなると二人っきりの場で侮辱を受けても、死を選ばなくちゃならんだ ... あんなごろうき(Fallot)だって侮辱されたら決闘とまでは行かなくても、せめて殴り合いぐらいやればいいんだが、だめだね、そうすると用心深くなって危険を冒すようなまねはしないでだろう。」(S.35)

特に最後の引用には、名誉規定における身分差別がグストルの意識に入り込んでしまっていて彼の目をすっかり曇らせている様がよく表れている。彼はたった今体験して思い知らされたはずの時代の変化を直視することが出来ていない。実際には、彼自身が口にした侮辱的な言葉に対してパン職人が敏感に反応して手厳しい仕返しをした。それによって彼は名誉を失い、自決へと追い詰められてしまったというのに、彼には肝心の事態が何も見えていない。彼が気づくべきなのは、名誉なき一市民といえども»Sie, halten Sie das Maul!«などという粗暴な言葉を向けられることには我慢がならず、名誉ある上層に立ち向かって、その非礼を咎めようとするだけの気概を示す、そういう時代の空気、というか息吹である。一介の職人にも尊重されてしかるべき社会的人格(名誉)が備わっていることをパン屋はグストル少尉に思い知らせようとしたのに、グストルには肝心の点がまだ分かっていない。

彼の身分差別的意識や驕りは時代の現実に追い越されてしまっている。彼の意識と現実との落差はパン屋の反撃に遭った時にグストルが「や、何だこれは? 何をする気だ? まさか ... とんでもない、サーベルの柄を掴んでいる ... いや、こいつ正気か? ... 〈... あ、あんた、ねえ...〉」(S.15)と慌てふためくところにもよく表れている。

身分制秩序が揺るぎない時代であったなら、»halten Sie das Maul!«と言われた側の下層はムツとはしても黙ったまま引き下がるしかなかっただろう。ほぼ同じ時代のハプスブル

ク帝国でも、首都から遠く離れた地方都市では、名誉なき身分の警備隊曹長スラーマは上司の子息で未来の将校たるヨーゼフ・フォン・トロッタ幼年学校生(しかも名門メーリッシュ・ヴァイスキルヒェン[Kavalleriekadettenschule Mährisch Weißkirchen])と妻の不倫を黙って耐え忍ぶしかなかった。⁷しかし大都市ウィーンではもはや古い秩序はかつてのような強制力を持たない。グストルですら「しまった、言うんじゃなかった、乱暴すぎた」(S.15)と後悔の念に一瞬襲われるほどである。とっさの感情だが、これは身分制とは無関係の民主的、人間的な反応である。だがそれ以上に、名誉なき下層の側は従来の非民主的、非人間的な因襲の枠にもはやおとなしく収まってはいない。

パン屋の親方の怒りは、青二才に過ぎない小僧っ子少尉⁸の驕りに対する腹立ちと、人間性を無視した身分制秩序に対して常日ごろ抱いていた憤懣が重なったものである。これはいわば個人的次元の民主革命、下剋上である。シュニッツラー文学に描かれた身分制秩序の破綻に関しては『戯れの恋(Liebelei)』、『遺志(Das Vermächtnis)』、『家族(Familie)』、『夜明け前的一幕(Spiel im Morgengrauen)』の4作品について論じたことがあるが、⁹『グストル少尉』の成立時期はそれらの中間にあり、同じ問題をテーマの一つとして共有していると見て間違いないだろう。

2. 名誉と名誉規定の呪縛

興味深いのは、パン職人がグストル少尉を懲らしめる際、名誉規定を踏まえたうで振る舞っているという事実である。彼は将校たちと同じカフェに出入りする常連として、彼らの会話などから明らかに将校たちの名誉規定に通じていたと思われる。

それはまずパン屋がグストル少尉のサーベルの柄を押さえ込むところに表れている。その場面を振り返ると、彼は相手のサーベルの柄を掴み、『少尉さん、もしちょっとでも大声出したりしたら鞘からサーベル引っこ抜いてへし折ったやつを司令部に送りつけてやるからな。このアホガキめ(dummer Bub), 分かったか?』(S.15)と言う。攻撃がサーベルに集中しているのはそれが軍人の名誉の象徴だから、という以外にもう一つ理由がある。

⁷ 注 5 参照。

⁸ 『ラデツキー行進曲』では決闘で倒れたドクター・デーメントの舅でやり手実業家のクノッフマッハー氏が「このバカげた軍隊とその気違いじみた制度とに業を煮やし」、「名誉だの決闘だのという愚劣なことを廃止する今や潮時であり、20世紀に将校などという役立たずの若造どもをのさばらせておくようではだめだ」と考えている。Roth, Joseph: *Radetzkymarsch*. In: Joseph Roth Werke 5. Romane und Erzählungen 1930-36. Amsterdam 1990 S.252f.

⁹ 武田智孝: 「可愛い町娘(das süße Mädel)」の自殺, そして復讐 シュニッツラー文学に見る身分制秩序の破綻と崩壊 広島ドイツ文学 25号 2011年, 所載 33-48頁。
ホームページ Germanistenkreis in Hiroshima から pdf ファイルをダウンロードできる。

上層が名誉なき下層に何を言っても侮辱にはならないが、逆に下層が上層を辱めたとなると、上層の名誉は傷つき、即名誉回復の措置を取らなければならない。相手が少尉と同等の上層であれば、侮辱に対しては決闘に訴えて名誉を回復することが出来るが、決闘資格を持たない庶民相手では決闘という選択肢はない。

名誉なき市民による侮辱に対して上層は即座にサーベルで切り付けることが「名誉を守るための正当防衛(Ehrennotwehr)」¹⁰として定められていた。パン屋が少尉のサーベルの柄を押さえ込んだのは、軍人の名誉を貶める意図もあるが、それ以上に、「正当防衛」としての反撃を阻止するためである。彼は腕っ節に自信があった。案の定グストルは切り付けるどころか、身動きすら封じられた。

グストルが後になって「なぜ追っかけて行って頭をぶち割らない? ... いやだめだ、それはだめなんだ ... すぐその場でやらなくちゃだめなんだ ... なぜしなかった? ... 出来なかったんだよ ... やつがサーベルの柄を押さえ込んだ、しかもおれより十倍も強い。」(S.16)とか、「そのあと、やつがその場を離れてからでは遅いんだ... 追い駆けてサーベルを後ろから突き刺すってわけには行かんのだ。」(S.17)とか、同趣旨のことを何度も繰り返すのは、軍人に課せられた名誉規定を復唱しているのである。

そのうえパン屋はグストルを「アホガキ(dummer Bub)」と罵っている。ガキ(Bube)だけで既に十分な侮辱で、上層人士どうしならそれで即決闘である。¹¹ まして「アホガキ」となると「ゲス野郎(Schuft)」(『ラデツキー行進曲』)¹²などと並んで口頭による侮辱の中でも最たるものの一つである。サーベルの柄を押さえ込まれて手も足も出なかったことと併せて、言われた側からすると屈辱の極みなのだ。怒りに震えるパン屋の言動は冷静に名誉規定を踏まえていて、計算し尽されたもののように思える。

パン屋が将校たちの名誉規定に通じていた証拠の二つ目は、すべて他人に見えないように大きな体で覆い隠すようにし、他人に聞かれないように「低い声で」グストルの「耳元で言った」(S.16)ことである。パン屋は別れ際に『だがな、おれはあんたの将来をぶち壊すつもりはない ... だからおとなしくしてるんだ! ... よろし、心配しなさんな、誰も聞いちゃいない ... 一件落着だ ... よろし! おれたちが揉めたなんて誰も思わないように、これから愛想よく別れましょうぜ! さよなら少尉さん、お会いできて嬉しかったですよ、ご機嫌よう!』(S.16)と言うのである。

パン屋は将校たちの重んじる名誉というものの性質をよく知っていたと言える。

ショーペンハウアーの有名な定義にあるように、「名誉とは、客観的には、われわれの価値についての他人の判断であり、主観的には、その判断に対する恐れである」。¹³

¹⁰ Arthur Schnitzler *Lieutenant Gustl*. Text und Kommentar. Herausgegeben und kommentiert von Ursula Renner. Suhrkamp. 2007, S.82, S. 137.

¹¹ 注 6 に同じ。

¹² Roth, Joseph ebd. S. 226.

¹³ Schopenhauer, Arthur: *Aphorismen zur Lebensweisheit*. Insel Taschenbuch. 1976, S. 68.

名誉のカギを握るのは自分以外の他人なのだ。屈辱の場면을他人に知られたか否かは名誉に関する最も重要なポイントなのである。

この場面でもそれ以降もグストルが終始いちばん気に掛けるのも、周囲の人に聞かれなかったか、気付かれていないかという点である。「騒ぎだけはダメだ(Kein Skandal)」(S.16)「聞いた者はいないだろうな? ... いないはずだ、低い声でおれの耳元で言ったんだから ...」「やつが大声出さなかっただけでも有難いと思わなきゃ! 一人でもあれを聞いた者がいたら、おれは即自決だ。」(S.16) その後も同じ心配を幾度も口にする。

だがそれだけでは済まない。相手が行き付けのカフェの常連で顔見知りなので、この一件を言い触らされるのではないかという不安が付け加わる。「しかもやつはおれと顔見知りだ ... ちくしょう、やつはおれのこと、おれが誰か知ってるんだ! ... 会う人ごとに喋るだろう、おれに何て言ったか! ... いやそんなことはしない、でなきゃわざわざ声を低くしたりしないよ ... おれ一人にしか聞こえないようにしたんだ! ... やつが皆に喋らないって保証がどこにある、今日か明日か、かみさんに、娘に、カフェの仲間に、——」(S.17f.)

パン屋が完全に沈黙を守り通してくれれば、一件は二人だけの秘密になるかもしれない。だが『決闘介添人(Der Sekundant)』のように二人が共犯関係にあるのであれば、名誉の掟を犯した二人がともに沈黙を通すことで両者の名誉が守られるから〈完全犯罪〉が成立する可能性はある。しかしこの場合、恥辱は一方的にグストルの側にのみある。名誉などとは無縁のパン職人はもともと失うものがない上に、その振る舞いにおいても恥ずべきところなど何もなかった。一件が明るみに出て社会的生命を断たれるのはグストル少尉だけなのである。

確かにパン屋は少尉の「将来をぶち壊」さないよう、すべてを二人だけの秘密にしておこうとする意図を示してくれた。彼は今後も沈黙を守り通し、他の誰にも秘密を漏らさないかもしれない。しかし、パン屋本人は知っているのだ。パン職人が生きている限りグストルの汚辱は消えない。しかも行き付けのカフェで毎日のように顔を合わせる間柄なのだ。パン屋の前でグストルはまともに顔を上げられない。たとえ名誉なき一市民に過ぎないとはいえ、パン屋に対してだけは生涯グストルは恥辱を感じ続けねばならない。この一点において少尉の名誉は間違いなく既に失われている。噂を広められるのでは、という怯え以前のこれは問題である。だから、「とんでもない、明日また奴と顔を合わせるんだ! 明日カフェに行ったら、奴はいつものようにそこにいて、シュレジンガー氏や造花店の主人らとトランプやってる ... いやいや、だめだ、だめだよ ...」(S.18) と思うのである。

『エフィ・ブリースト』でインシュテッテンは「秘密を知る者(Mitwisser)」という言葉を使い、一人でもそういう者がいれば、名誉は失われる、と言っている。¹⁴ パン屋は相手に気遣ったと見せかけて、実は時限爆弾を仕掛けたようなものである。グストルの屈辱感

¹⁴ Fontane, Theodor: *Effi Briest*, Stuttgart 1981 S.268.

と怯えは秘密を知るもう一人の証人であるパン屋が生きている限り続くのだ。

パン職人が卒中で死んだことを知らされた時のグストルの狂喜もそこから理解できる。

その際グストルは「死んだんだ、やつは— 死んだんだぜ! 誰も知る者はいなくなった、何も起きなかつたんだ! — カフェに来たつてのはツイてたぜ ... 来なきや無駄死にするとこころだった」, 「要はやつが死んだつてこと, そしておれは死なずに済んだつてこと, おれはすべてを取り戻したつてわけだ!」(S.44f.)と言っている。

ショーペンハウアーの言う通り, 名誉というものが, 「われわれの価値についての他人の判断であり, (...)その判断に対する恐れである」のならば, あの恥辱の場面を知る者が一人もいなくなれば, 名誉は守られる。「誰も知る者はいなくなった」ということは, 名誉に関する限り「何も起きなかつた」のと同じ, グストルは「すべてを取り戻した」のである。上に引いたグストルの独白は, あくまで他人を基準とする名誉というものの本質を見事に暴いている。語り手の視線はシニカルである。

さて, グストルがいかに名誉規定の虜になっているかについて, 重要なことを更に幾つか付け加えねばなるまい。

グストルがクロークルームで**»Sie, halten Sie das Maul!«** などという粗暴な言葉を口にしてしまうほど苛立っていたいちばんの原因は, 先にもちょっと触れたが, 決闘を翌日に控えていたことである。これはあるパーティーの席で弁護士がグストルに向かって「少尉さん, きつと反対なさらんでしょうが, あなたの仲間たち全員が, 祖国を護りたい一心で軍隊に入られたつてわけじゃないですよね!」(S.12)と言ったのがきっかけだった。

帝国将校へのそんな侮辱発言を聞き流すわけには行かないというのが表向きの理由だが, 別の事情もある。「おれはもう怒り心頭だった! 弁護士センセイの言い方はズバリおれに当てつけてるみたいだったからな。おれがギムナージウムを退学になって, やむなく幼年学校に突っ込まれたつて, あからさまに言わなかつただけじゃないか」(S.12) 弁護士の指摘は凶星で, 痛いところを突かれていきり立ったという面もある。だが, 「おれのやったことは間違つてない。あんなことを言わせつばなしにしなかつたことに満足してる。思い出しただけでもはらわたが煮えくり返る! おれの取つた態度は立派だった。対応に非の打ちどころなし, と大佐殿も仰つてくださつてる。この一件おれにとって損にはなるまい。」(S.11)という事情もある。つまり点数稼ぎである。決闘は法的には禁じられていたが, 軍人の名誉を守るために命を賭したというのは昇進に有利だった。グストルは完全に当時の名誉規定の枠組みにはまり込んでしまっているのだ。

名誉規定に乗つかつて相手を懲らしめるつもりが, いわばそれがきっかけにもなって逆に名誉規定によって死へと追い詰められるという皮肉なめぐり合わせがここに描かれているわけである。尤も「とんでもない幸運」(S.44)によって命拾ひしたグストルはまったく懲りた様子もなく, 相手を「ナマスに切り刻んでやる」(S.45)と息巻く, その言葉でこの小説は終わつている。長い一夜の懊悩を経ても名誉規定の呪縛は解けないまま, グストル

自身は変化しない。

名誉規定遵守という点でのグストルの徹底ぶりはその葛藤にも反映されている。

彼の選択肢は必ずしも自決だけではないのだ。

名誉喪失は〈社会的な死〉とは言え、同じサークルの中に限られている。同じ上層社会・軍隊と、さらに地域的に限られた範囲でのことなのだ。ランクを下げて名誉などとは無縁の一般市民に成り下がって生きて行くことは可能だし、事情を知る者が誰もいない遠方へ行ってやり直すことだってできる。

この小説の中にもさりげなく二つの事例が引き合いに出されている。

一つは同僚だったリングアイマーという元将校の例。「気楽に考えるやつらだっているさ ... 人さままだよなあ! リングアイマーは燠製業の男から、そいつのかみさんと寝たところを押さえられて、頬打ち喰らったが、軍を辞めて田舎に引っこみ結婚した」(S.21)

「頬打ち(Ohrfeige)」は象徴的な意味を持つ侮辱行為の代表で、グストル少尉の場合と同じくリングアイマーの相手も職人、つまり〈決闘資格のない〉市民だからすぐその場で反撃しなければならなかったわけだが、準備が出来ていなかったため、対応できなかった。結果、噂を広められて名誉喪失となった。噂一つでも名誉は失われるのである。グストルがすぐ続けて「あんな奴と結婚する女もいるんだな! ... 彼がウィーンに出て来たって握手なんかしないからな」(S.21)と言うように、元同僚を初めとする軍人や上層社会からは不可触民か悪性の伝染病患者のように接触を拒否される。名誉を失うとはそういうことである。グストルはこれに堪えられない。「... そういうわけだ、分かったかグストル — お終い、お終い、お前の人生は終わったんだ! ピリオッドを打って、その上に砂を撒いてお終いだ! ... さあこれで分かった、話は簡単 ...」(S.21)と言うのである。

しかし死ぬのが怖いというのが本音だから、残されたもう一つの実験肢、誰も知る者のいない遠い土地への逃亡、についても考える。

「怖いよ、怖い! ... 逃げる方がいいよ — アメリカなら誰もおれのこと知らない ... 今晩ここで何が起きたかなんて誰も知らない ... そんなこと気に掛ける者なんかいない ... こないだ新聞に載ってたな、ルンゲ伯爵とかいう人のこと、何かスキャンダル起こして逃亡、海の向こうでホテル業で成功して、過去の一件なんか笑い飛ばしてるって。」(S.29)

後になってグストルはアメリカ逃亡について考え直す。その際、「軍を辞めてアメリカへ渡るなんてたわごとだ、お前はアホ(dumm)過ぎて新規に何かを始めるなんてできっこない」(S.31)と自分の無力を認め、あっさりこの選択肢を諦める。

下層社会への差別意識、名誉・名誉規定尊重などと並んで、彼が当時の将校たちの平均的な生き方や価値観にはまり込んでいた証拠は他に幾つも見られる。習慣化した賭けトランプ、賭けに負けて作った借金とその返済、ユダヤ人蔑視、高学歴の予備役将校への不満、戦争待望。「おれたちの世代に戦争が巡って来ないってのはツイてないよ。 — こんな死に

方より ... 名誉の戦場で、祖国のために死にたかったな。」(S.40) グストルがそのために死にたいと言っている「祖国」はかろうじて平和と統一が保たれた多民族国家であり、今度戦争があれば必ず瓦解するだろうという予感が漂っている。「祖国のために死に」たいという自らの思いの空虚さを彼も心の底では感じているのかもしれない。テキストの最初から顕著に見られる彼のアンニュイと苛立ちは個人的事情を超えた時代的な面もある。

彼が今つきあっている〈可愛い町娘(das süße Mädl)〉シュテフィへの言及の多さは特に目につくが、その娘との関係についても、彼の独白には当時の若い少尉たちの色事の実態が生々しく吐露されている。その点にも注目したい。

いずれもその乏しい懐事情と関連する。一つはシュテフィに実はダンナがついていて、そいつに自分との関係がバレたらヤバイことになる(「もしダンナがおれたちの関係を嗅ぎつけたらひどいことになるぜ、彼女の面倒を見なくちゃならなくなる」[S.13])と心配するところだ。手元不如意のために町娘に十分な贅沢をさせてやれないので、やむなくダンナとカノジョを共有するしかないのである。しかもダンナは「ユダ公」で「予備役の将校」なのだ。「そう、愉快だったぜ一週間前、シュテフィがダンナと園芸協会クラブに来ていて、おれはコペツキと差し向かいだった。彼女は何度も目で合図を送ったのに、ダンナの方は何も気付かなかったーバッカじゃないの! ユダ公だろ、きっと! 当たたりきよ、銀行勤めで黒い口髭を生やしてる... 予備役の将校だとも聞いたな!」(S.9)

もう一つは、終わり近くになって、「シュテフィのあとまだ何人かと付き合って、しまいにはそれ相応の、持参金(Kaution)付の良家の娘と... そうなるとよかったんだが」(S.41)と思うところである。「持参金」と訳した Kaution は、将校が結婚に際して国庫に納めることを義務付けられていた供託金で、万一の場合寡婦と遺児に支払われるべき年金基金への納入金である。これは結婚する双方が折半して負担せねばならぬほどの額だったので、相手は裕福な良家の子女でなければならなかった。若い少尉たちはしっかりとその辺のところも計算していて、けっして可愛い町娘にのめり込むようなことはなかった。もしまかり間違っても町娘に惚れ込み結婚でもしようものなら、「お人よしのシュトランスキー叔父さん(der gute Stransky)」¹⁵ に対するフォン・トロッタ郡長の軽蔑ぶりに明らかなおとり、上層社会の憐れみと蔑みの対象になることを覚悟しなければならない。グストル少尉は特別計算高いわけではない。何につけても当時の将校の平均値を生きているだけである。

3. グストルに〈恥を知る心〉〈内的名誉〉はないのか?

では、通常〈恥を知る心〉とか〈内的名誉〉とか言われるものはこの主人公にはないのだろうか。ショーペンハウアーの定義では、そんなものは他人の評価に対する恐れにすぎないと決めつけているようだが。

¹⁵Roth, Joseph: *Radetzkymarsch*. In: Joseph Roth Werke 5. Romane und Erzählungen 1930-1936. Hrsg. von Fritz Hackert. Kiepenheuer & Witsch Köln 1990, S. 180.

グストルの独白に〈内的名誉〉を思わせる部分がないわけではない。

「ああ、他人が知ってようといまいとどうでもいいんだ! ... おれが知ってるんだ、肝心なのはそこだ! — 感じてるよ、自分が一時間前とは別人だって — 決闘資格をなくした、だから自決しなきゃならんのだ、分かってるよ。」(S.19) ところがそこで一呼吸も置かず「... 気の休まる暇もないんだ、今後一生 ... 常にびくびくしてなきゃならない、誰かに知られるんじゃないか、とか ... 誰かが面と向かって今晚のこと言うんじゃないかとか!」(S.19)と続けている。

〈内的名誉〉を重んじる軍人の矜持が、スルスルと継ぎ目もなしに、自らの汚辱が世間に広く知れ渡ってしまう外聞への恐怖、「他人の判断」への怯えにすり替わってゆく様がこの独白には写し取られている。前半は軍人として叩き込まれた心得を復唱しているにすぎず、そんなものはたやすく本音に覆い尽くされ、呑み込まれてしまう。ここに描かれているのは、そういう意識の流れなのかもしれない。

だが、その 2 ページ後で更にもう一度グストルは、「やつが今晚卒中で倒れても、おれが知っている ... おれが知ってるんだ ... あんな辱めにあつて、軍服を着、サーベルを帯び続けるようなそんな人間じゃないんだおれは!」(S.21)と言っている。

これを考えると、必ずしも〈内的名誉〉を建前とか表向きとしてのみ軽く片付けてしまうわけにも行かないようにも思える。それに、これは誰に聞かせるためでもない独白という形を取っているから、カッコウ付ける必要があるわけではない。〈内的名誉〉もかなりな程度に少尉グストルの内面に入り込んでいることは認めなくてはならない。彼を根っからの恥知らずのように批判するのは控えるべきかもしれない。

パン職人が「卒中で」死んだことを知らされた途端グストル少尉が有頂天に舞い上がるのは、確かに彼自身が〈口にする〉立派と呼ぶしかない〈内的名誉〉の〈前言〉からすれば、手のひらを返したような無節操ぶりである。しかし、カギを握る唯一の他人の死によって命が助かったのである。秘密を知る者が一人でもいれば、恥を雪ぐために自決しなければならないが、誰も知る者がいなくなれば、名誉規定に言う恥辱とか不名誉は存在しない。証人が消えれば不名誉も消え、自決の必要などなくなったのだ。死なずに済んだのだから喜ぶのは当たり前ではないか。

だからと言って、「たとえ 100 歳になっても(...) 忘れられない」(S.31)という言葉が嘘偽りだと言うのは間違いだろう。この晩の恥辱は苦い思い出として死ぬまで彼の心に留まり続けるはずだ、という意味である。平均的な人間にとって〈恥を知る心〉とか〈内的名誉〉とかはその程度のものであろう。そう考える方が現実在即して、グストルの〈変節〉ぶりをあまり厳しく咎めだてすべきではないのではあるまいか。

4. ズーダーマン『名誉(Die Ehre)』との比較

グストルが遠国への逃避を考える際、アメリカに逃亡してホテル業で成功した「ルンゲ

伯爵とかいう人のこと(von einem Grafen Runge)』(S.29)を例に挙げているが、インターテクスト的には、この小説の 11 年前(1889 年)ベルリンで初演されて大成功を収めたブーダーマン戯曲『名誉』の中心的人物トラスト伯爵を指していると考えられるべきであろう。シュニッツラーは明らかにこの芝居を意識している。

トラスト伯爵は名誉規定の命令を足蹴にしてインドをはじめとする東南アジアに逃れ、コーヒー王となって、旧世界が依然として尊重し続ける名誉を笑い飛ばす。

伯爵は賭博で大金を摩るが、当時の将校社会の掟では 24 時間以内にその借りを返すことができなければ名誉を失い、恥辱を雪ぐべく自決しなければならなかった。グストルが前日の賭けで摩った 160 グルデンとその返済のことを終始気にし続ける[5 回言及する]のは、彼がいかにも名誉規定に忠実であることを示すとともに、ブーダーマン戯曲との関連をも示唆していると思われるべきであろう。支払不能が明らかとなった時、友人たちは装填したピストルを黙って机の上に置いて伯爵の許を去った。「名誉を失った者として当然私はこれ以上一刻たりとも生きて行けないと思った。だが、いざ銃口をこめかみに当ててみると、突然思いあたったのだ、これは野蛮で、バカげている。三日前に比べて今のお前にどこが足りないというのだ。愚かな若者として支払能力を超えた金額を賭けて負けたのだから鞭打ちぐらいには値するかもしれないが、死ぬ必要まではない。何千年ものあいだ人間は名誉などという幻影(Phantom der Ehre)に煩わされることなく気楽に生きてきた。今日でも人類の 99.9 パーセントはそんな風に生きている。彼らのように生き、彼らのように働き、彼らのように生きることを楽しめ。」¹⁶

傍点部分がグストルとの違いだが、特に「三日前に比べて今のお前にどこが足りないというのだ」と、グストルの「感じてよ、一時間前とは別人だって、決闘資格をなくした、だから自決しなきゃならんのだ」(S.19)との隔たりは明白であろう。彼の独白に、名誉規定の理不尽さに対する批判や反発はいっさい見当たらない。

グストルは一晩中煩悶を続けるが、その葛藤は「生きるべきか死ぬべきか」ではなく、「死ぬしかないが、死にたくない」である。「名誉規定に従って自決すべきか、名誉規定など無視して生き続けるべきか」ではなく、「名誉規定に従って死ぬしかない、しかし死ぬのは怖い」である。軍規・名誉の軛にかけられた若い生命の足掻きである。

トラスト伯爵との違いはどこから来るのか。

グストルが「アホ」であるという以外にも理由はある。

第一は、次の泣き言みたいな独白の傍点部分に注意していただきたい。

「がまんならんよ、がまんならん! — そんなことでおれのような者が、こんな若いかつこいいやつが ... 後できっとみな言うよな、あそこまでやることなかったのに、あんなくだらんことで、惜しかったなあ! って。しかし今もし誰に訊いたとしても、答えはみな同

¹⁶ Sudermann, Hermann : *Die Ehre*. Stuttgart (Reclam) 1982, S. 33.

じだ ... おれだって同じ考えさ ... いまいましいことだ ...おれは自決するしかないんだ、ほかに道はない」(S.20)

ここには名誉規定への不服従をほとんど不可能にする事情が語られている。将校たちの世界を支配する無言の圧力、了解、空気のようなものだ。インシュテッテンの言う「われわれに有無を言わさぬ社会的な何か(jenes [...] uns tyranisierende Gesellschafts-Etwas)」¹⁷である。グストルにはフォンターネの人物のような分析的知性はないが、感じているものは同じで、死ぬのは「怖いよ、怖い！」(S.29)、でも、規定には従うしかない、のである。

彼が名誉規定を無批判に遵守するもう一つの理由は、もともとグラーツの中産階級出身で、ギムナージウムを退学になって幼年学校に突っ込まれ、いわば成り行きで少尉になったという経歴が示すように、彼がアップークラス(将校)への新参者だからである。そういう者は新しく身に着けさせられた仕来たりや規則をむやみと有難がり、客観的に突き放して見る余裕がない。『名誉』で、裏長屋出身の成り上がり者ローベルト青年は「(生まれつき授かっていたわけではない[引用者注])名誉の理念を外部から植え付けられたせいで、(名誉について)あなた(名誉ある身分に生れついたトラス伯爵[引用者注])のように高い見識を持ちえない」¹⁸と言っているが、グストルにも同じ事情がある。

第三に、賭けで失った金を定められた期間内に支払えないというのと、名誉なき一市民に対する不躰な言動がきっかけで相手からサーベルの柄を押さえ込まれたうえに「アホガキ」呼ばわりされて手も足も出なかったというのとでは、屈辱の度合いが違う。グストルのケースは形式的な名誉規定違反として批判的に突き放すのが難しい。

シュニツラー小説は、既に述べたとおり、名誉の根幹にある身分制社会の差別的構造や主人公の身に沁みついた差別意識と、それに不満を覚える市民層の人権意識の目覚めとが衝突する場面を起点に始まり、名誉ある階層(将校)に名誉保持、名誉規定遵守を迫る無言の社会的圧力(Gesellschafts-Etwas)が判断と行動の自由を奪う有様を描き出している。

ゾーダーマンの『名誉』について碩学ヴァインリヒは、トラス伯爵の「ここだけの話ですが、名誉なんて存在しないのですよ(Im Vertrauen gesagt: Es gibt gar keine Ehre!)」¹⁹という台詞によって名誉はとどめを刺されたと言っているが、²⁰伯爵の言っていることは頭の中、口先だけのことで、実際にはこの戯曲の後に発表されたフォンターネやシュニツラー作品の人物たちが嘆いている通り、「有無を言わさぬ社会的な何か」が消え去らない限り、身分特権としての名誉とか名誉規定は依然として拘束力を失わない。

トラス伯爵はその後インドをはじめとする東洋の植民地に赴き、コーヒー王になった。世紀末の名誉劇でそれを可能にしたのは交通交易の発達と植民地主義である。「私もいわ

¹⁷ Fontane, Theodor, S. 268.

¹⁸ Sudermann, Hermann, ebd. S. 87f.

¹⁹ Sudermann, Hermann, ebd. S. 52.

²⁰ Weinrich, Harald : *Mythologie der Ehre* In: Merkur (1969) S. 224-239, S. 224.

ゆる名誉を失った人間だが、君も知っての通り今や大したやつ(wackerer Kerl)じゃないのかね。」(Eh. 88)と伯爵は胸を張る。

しかしトラストは伯爵である。名誉を嘲笑っても爵位まで捨てるわけではない。彼は名誉喪失の貧乏貴族から貴族の大富豪になった。ただの金満家と大金持ちの伯爵とでは格が違う。彼を見る周囲の目も扱いも違う。借金は返したのだし、既に長い時間の経過もあるし、過去の「名誉喪失」などほとんど形だけのもの。決闘資格を失ったままなので、決闘を挑んでも要求に応じてもらえないといった程度の影響しかない。彼は上層社会の名誉や名誉規定を嘲笑うが、依然として爵位が放つ威光を借り、その恩恵には浴し続ける。古い価値観を捨て去ったように見えながら、旧秩序から完全に独立しているわけではない。帝国主義、植民地主義をうまく利用したこととあわせて、伯爵は要領がいいのである。

トラスト伯爵が保持し続ける爵位も名誉と同じく身分特権であることも、巨万の富を可能にした欧州列強による植民地支配や原住民搾取も、由々しきはずの問題がこの芝居では俎上に載せられることなくすべて素通りされる。ローベルトの妹の純潔をも含めて、ものにはみな「それに見合った値段(Tauschwert)」²¹があるとする伯爵の考え方にしても、何でも金で解決できると信じるミューリンク家のブルジョワ的価値観とどれほどの違いがあるだろうか。ヴァインリヒの賛辞にもかかわらず、筋立てそのものが半ばおとぎ話めいて甘いことも併せて、ゾーダーマン戯曲の文学としての質には疑問が残る。

文学の主人公としてグストル少尉とトラスト伯爵を比べて見ても(トラスト伯爵は主人公でないが、狂言回しとして常に物語進行の中心にいる人物)、利口者が理性と気転と行動力によって問題を手際よく処理してしまうのに対して、愚か者は問題を全身に浴び、もがき苦しむ、のたうち回る。それによってことの全貌を具体的に浮かび上がらせて見せる効果がある。アホな主人公がバカバカしい限りの言動を展開してみせることで、読者は名誉規定の理不尽さを、理性的に処理されてしまうよりはるかに生々しく思い知らされる。

5. ツッコミなきボケ

パン屋の親方はグストルを「アホガキ(dummer Bub)」(S.15)と叱りつけて、これが一切の起点となり、キーワードになる。グストル自身も自らを dumm と認めている。(S.31)

Gustl が August の縮小形であり、der dumme August は道化、クラウンのこと。さらにウィーンの俗謡 O, du lieber Augustin²² で嘲りと憐れみの的にされている Augustin はこれまた August の縮小形だし、当時まだプラーター公園に残っていた Wursteltheater の道化・阿呆 Wurstel(←Hanswurst)と Gustl は音が類似していることから、両者の相同性も指摘され

²¹ Sudermann, Hermann, ebd. S. 86.

²² O, du lieber Augustin, Augustin, Augustin, O, du lieber Augustin, Alles ist hin! Geld ist hin, Mädli ist hin, Alles ist hin, Augustin! O, du lieber Augustin, Alles ist hin!
Wikipedia の項目 Marx Augustin による。

ている。²³ グストルが眠り込むプラーター公園の現在観覧車のある辺り、そこは *Wurstelprater* と呼ばれていた。しかも人形劇場。グストル少尉はまさに木偶、正確には操り人形であろう。操っているのは言うまでもなく身分制社会の仕来たりと名誉規定である。

既に述べたとおり、「とんでもない幸運」(S.44)によって命拾いしたグストルはまったく懲りた様子もなく、午後に予定されている決闘の相手を「ナマスに切り刻んでやる」(S.45)と息巻き、その言葉でこの小説は終わっている。長い一夜の懊悩を経ても名誉規定の呪縛は解けないまま、グストルは学習しない。(本論 8-9 ページ参照)

それもそのはず、彼は終始名誉や名誉規定に取り憑かれて、疑うどころではなかったのだから。唯一の証人だったパン屋が亡くなったことで名誉喪失を免れ、名誉規定による自決命令から自由になった今、残るは同じ名誉規定に則り、決闘によって相手を倒すことだけ。勇み立つのも無理はない。首尾一貫とはまさにこのことである。

グストルは我が国漫才に言うところのボケであろう。ツッコミなきボケ。主人公はトボケるのではなく、あくまで大真面目に終始ボケまくる。そんなボケを批判しても始まらない。トボケているのは作者。陰に潜む語り手はポーカーフェイスで主人公に愚かなことをさせ続け、言わせ続ける。

ツッコミを入れないことで、語りは不気味なほど醒めたものとなる。

主人公の愚かしさはほぼすべてアナクロニズムそのものである。その意味で彼はハプスブルク帝国末期の典型的な人物になりおおせていると言える。その時代、特に上層社会に属する者たちの多くが古い伝統、制度、観念に縛られ、時代遅れの慣習や価値観に取りつかれたまま、新しい時代の波の上をあぶくのように漂いつつ破滅に向かって流され続けていた。その有様が一人の愚かな若い将校の姿を通して、この小説には酷薄なほど冷徹な筆致で書き留められている。

„Leutnant Gustl“: Eine Antizipation des Untergangs der Ständegesellschaft

Tomotaka Takeda

„Und warum hab' ich ihm (dem Bäckermeister) denn nur gesagt: »Halten Sie's Maul!«? (---) ... aber natürlich, nervös bin ich gewesen“ sagt Gustl zu sich selbst und zählt „alle die Sachen“ auf, die ihn zornig gemacht hatten. Trotz alledem, wenn sein Partner ein Ehrenmann gewesen wäre, wäre ihm das nie „ausgerutscht“, denn was er gesagt hatte, war eine der schlimmsten Beleidigungen.

²³ Erläuterungen und Dokumente Arthur Schnitzler *Leutnant Gustl*. Von Evelyne Polt-Heinzl, Stuttgart 2000, S. 99f.

gungen, auf die er sofort zum Duell herausgefordert worden wäre. Dem satisfaktionsunfähigen Handwerker gegenüber konnte er unvorsichtig sein. Vor einigen Jahrzehnten hätte sich's der einfache Bürger, wenn auch im Innersten böse, gefallen lassen, aber um die Jahrhundertwende hatten sich die Verhältnisse geändert, und das hatte Gustl unbewusst wahrgenommen. Der Bürger hatte ihn als „dumme(n) Bub(en)“ beschimpft, den Griff von Gustls Säbel in der Hand haltend. Er wusste wahrscheinlich, dass auf die Beleidigung durch den Satisfaktionsunfähigen der Offizier auf der Stelle den Säbel ziehen und auf ihn losgehen würde, was als Ehrennotwehr erlaubt und verlangt war. Der Bäckermeister war ein Kraftmensch, dessen Hand Gustl vom Säbelgriff nicht wegbringen konnte.

Solange der Bäcker, der einzige Mitwisser, lebt, bleibt Gustls Ehre verloren. Um die Ehre wiederherzustellen, gibt es für ihn laut Ehrenkodex keine andere Möglichkeit mehr, als sich zu erschießen. Falls er den Ehrverlust hinnähme und die Schande überlebte, gäbe es die Möglichkeit, irgendwo entfernt von Wien als satisfaktionsunfähiger Bürger zu leben oder nach Amerika zu fliehen, wo „(ihn) niemand kennt“, und ein neues Leben zu beginnen. Er muss sich aber eingestehen, dass er weder schamlos noch tüchtig genug ist.

Ihm ist die Ehre unentbehrlich und der Kodex absolut. Bei seiner inneren Qual handelt es sich nicht um „Sein oder Nichtsein“, nicht um Leben oder Sterben, sondern darum, sich töten zu müssen und keine Alternative zu haben. Seine Gedanken kreisen immer nur darum, dass er, um seine Ehre zu retten, sich erschießen muss, dies aber „schrecklich“ sei. Seine Ehre zu wahren und zugleich weiterleben zu können, so ein „Mordsglück“ wird nur dadurch ermöglicht, dass der Bäckermeister, der einzige Mitwisser, stirbt. Als das Wunder geschieht, jubelt Gustl insgeheim auf: „Tot ist er – tot ist er! Keiner weiß was, und nichts ist g'scheh'n!“ Darin stellt sich die Hohlheit der Ehre bloß.

In der Anfangsszene hatte ihn u.a. das „morgen nachmittag“ erwartete Duell nervös gemacht, was die groben Worte veranlasst hatte, die ihm um ein Haar fatal geworden wären. Also treibt ihn ironischerweise derselbe Ehrenkodex, aufgrund dessen er einen Juristen auf Säbel fordert, in die Enge, und jetzt lässt sich der mit knapper Not Davongekommene aufs neue zum Duell hinreißen: „Dich hau' ich zu Krenfleisch!“ Gustl bleibt konsequent, indem er immer auf Ehre und Ehrenkodex hält, was den Verfall der verantwortlichen Schicht der Ständegesellschaft andeutet.